イサム・ノグチのデザインは平和都市の象徴

平和大橋（へいわ）・西平和大橋（にしへいわ）

広島市では、終戦の翌年の昭和 21 年、平和都市として後世に伝えていくために、原爆ドームの保存を含め爆心地に近い地区を公園として残すこと、また広島を川と緑のまちとするために河岸整備を進めることが決定されました。しかし、戦後の経済状態では困難と思われたため、広島を平和のシンボルとして新生させ、復興を国家事業とする「広島平和記念都市建設法」が、昭和 24 年に公布されました。広島のまちづくりは、この法によって急速に進みました。

まず取り組まれたのが、公園の南側に東西に延びる道路です。中央に車道、両側に緑地帯と歩道のある幅員 100 mの完成したばかりの道路は、緑地帯が閑散としてさみしいものでしたが、世界中から供木が寄せられ、現在の公園道路が形成されました。公園道路の中心となる平和記念公園への導入路に架かるのが、元安川の「平和大橋」と本川の「西平和大橋」です。この名称も、「平和大通り」とともに、昭和 26 年 11 月に一般公募によって決まりました。一歩ずつまちづくりは市民と進められたのです。

この 2 本の橋の欄干は、※1イサム・ノグチ氏設計によるもので、欄干について次のように語っています。

- 平和大橋の欄干について、「設計の際、私は、建設の理念、すなわち新たに自己の生活を建設する者の特に再建広島の理念を伝えるものとすべきであると考えていました。従って、私は、建設を意味する名前をその橋に付けたいと思います」と述べ、「つくる」と命名しています。
- 西平和大橋の欄干について、「出離の理念、すなわち「人生よさらば」広島がその記念となった悲劇の経験よさらばということを伝えるべきものと考えます。」と述べており、離別の理念をもって「ゆく」と命名しています。

平和大橋が全溶接橋であるのに対し、西平和大橋は従来工法の鋲接（リベット）橋です。構造的に際立った特徴はありませんが、シンプルであるだけに欄干が際立って見える気がします。

平和大橋の高欄先端の半円球が「東から昇る太陽」を表し、西平和大橋の高欄は、端部が弧を描いて地中に没しているため「西に沈む夕日」を表しているとされています。車で走りすぎるのではなく、ゆっくりと樹木に囲まれて歩くとノグチ氏や平和を願う人々の思いを汲み取ることができるのではないでしょうか。

平和大橋　L=86 m
平和大橋が全溶接橋であるのに対し、西平和大橋は従来工法の鋲接（リベット）橋である

■位置図

平和大通り

平和大橋のイメージは生を象徴する太陽の形

西平和大橋　L=102 m
「犠牲者が黄泉の国へ船出する死の象徴として船の竜骨をかたどった」と設計者のイサム・ノグチ氏が、1984（昭和 59）年に広島市を訪れた際に説明したという。

※1　イサム・ノグチ（1904 ～ 1988）・・・アメリカ合衆国ロサンゼルス生まれの彫刻家、画家、インテリアデザイナー、造園家・作庭家、舞台芸術家。